

もあるが、二本の住居跡が多い。各住居跡の規模は、一辺が四・五・五メートル前後であり、特に大型の住居はない。C地区1号住居跡は、床面が長さ五・六メートル、幅五・三メートルの長方形の平面形をなし、ベッド状遺構・屋内土壇・炉跡を持ち、主柱穴は二本と考えられる。出土遺物からみて、後期後半から終末の時期の住居跡である(第26図)。この時期の住居跡は、中央部から北部にかけてのC・D・E地区に集中する傾向がある。

## 二 金築遺跡

金築遺跡は祓川の沖積作用によって形成された豊津町北部の平野の北西部に位置する。この平野の西部には豊津丘陵が北方に延びている。遺跡はこの平野内の小河川によって削り残された微高地上にあり、標高は二六メートル前後である。東側の祓川までは約一・二キロメートル、西側の丘陵地までは約〇・二キロメートルの距離がある。

周辺の弥生時代の遺跡としては、西側約一キロメートルの甲塚北部から八景山を経て、行橋市竹並南部の丘陵地には前期・中期の集落や墓地が広く分布する。また、東側約一・三キロメートルの祓川右岸の段丘上には同時期の集落が確認されている。なお、当遺跡の所在地は大字惣社字金築・字宮ノ下である。

### 調査経過と

調査対象地は水田であり、遺跡は農村基盤総合整備パイロット事業の区画整理に先立って調査された豊前国府推定地範囲内で確認された。

調査は基本的に赤土の地山面と東辺部の黒色包含層の上面で遺構の検出を行いながら進めたが、黒色包含層の分布する場所では、部分的にその下の地山面で再度遺構の検出を行った。

発掘調査は昭和六十三年四月五日から九月二十日までの五か月余りに及び、設定した調査区は南北の長さ

約二六〇<sup>トメートル</sup>、東西の幅約八〇<sup>トメートル</sup>で、調査面積も全体で一萬四〇〇〇平方<sup>トメートル</sup>に達した。調査の主眼は奈良時代から平安時代にかけての豊前国府関係施設の解明におかれていた。また、区画整理事業の工期との関係から、弥生時代の遺構は個々の輪郭をすべて検出したが、工事による削平の可能性の高い南部の遺構の幾つかを完掘するにとどまった。なお、未調査の遺構の大部分は現在でも水田下に眠っている。

調査によって確認された遺構・遺物は弥生時代から鎌倉時代に及ぶものであり、主体は七世紀から八世紀前半にかけての方形竪穴住居跡からなる集落と、九世紀から十三世紀にかけての掘立柱建物跡を中心とする豊前国府に関連する集落とであった。しかし、これらに先行する弥生時代においても集落が営まれていたことが判明した。弥生時代の遺構としては、前期から中期にかけての円形竪穴住居跡約一〇棟・貯蔵穴約二〇基・土壙墓二基・甕棺墓一基などがある。遺構の分布は、全体的に調査区の南部西半部に集中していた(第二編第三章第8図参照)。

### 遺跡の詳細

当遺跡は、弥生時代前期末から中期前半にかけての円形住居跡および貯蔵穴からなる集落跡である。

SH024は当遺跡のやや北部に位置する円形竪穴住居跡である(第27図)。大きさは東西約五・五<sup>トメートル</sup>、南北四・九<sup>トメートル</sup>で、主柱穴は四本と考えられる。床面の北部壁面下には幅〇・二<sup>トメートル</sup>程度の周溝がめぐる。SH051は当遺跡の中央部に位置する円形竪穴住居跡である。削平により壁は破壊されているが、円形にめぐる八本の柱穴が確認された。柱穴の掘り方は径〇・二五<sup>トメートル</sup>・四五<sup>トメートル</sup>である。中央部には長径〇・八<sup>トメートル</sup>、短径〇・五<sup>トメートル</sup>の楕円形で、深さ〇・一<sup>トメートル</sup>の炉跡が検出された。床面の規模は推定で直径二六<sup>トメートル</sup>程度と考えられる。

貯蔵穴は長方形のものが一基あるが、大部分は平面形が円形をなすものである。

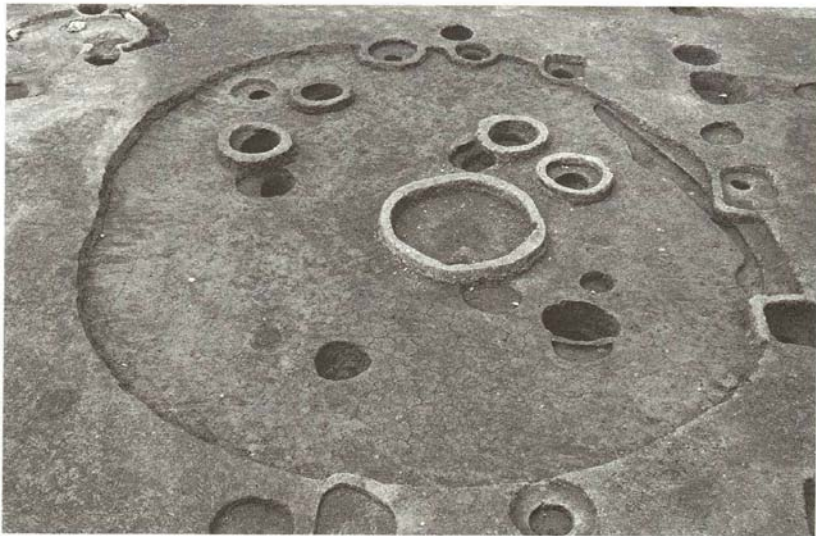
### 遺跡の性格

金築遺跡は、当地域における前期から中期にかけての一般的な集落の在り方を示す。つまり、住居跡は微高地の頂上部平坦面に行われ、三〜五軒で一集落を構成している。貯蔵穴は住居跡一軒につき二基の割合しか確認されていないが、斜面となる西部の調査範囲外に多数分布することが予想される。貯蔵穴の平面形が大部分円形をなすことは行橋市下稗田遺跡と共通している。

以上のことから、当遺跡の集落は別の場所にあった拠点集落から分かれた分村と考えられる。

### 三 源左工門屋敷遺跡

源左工門屋敷遺跡は祓川の中流右岸に位置し、現在の海岸線からは上流に約五メートルさかのぼっている。当遺跡は右岸台地の標高約二七〜三〇メートルの高さにあ



第27図 金築遺跡SH024